

第2学年 道徳学習指導案

日時 10月15日(金)第5校時

場所 2年教室

指導者 山下 昇

1 主題名 家族への敬愛 内容項目 4 - (6)

2 資料名 「一冊のノート」 (出典 中学生の道徳2 自分を考える 暁教育図書)

3 主題のねらい

父母、祖父母に敬愛の念を深め、お互いを思いやりながら家庭生活を送ろうとする。

*自分の成長を願い、無私の愛情を持って育ててくれた父母や祖父母があるから、今の自分があることがわかる。

*家族が注いでくれる愛情についてあらためて考えようとする。

*家族と積極的にかかわっていきこうとする。

4 主題設定の理由

<ねらいの道徳的意味>

人と人との関わりにおいて、一つ屋根の下に暮らす家族の絆は強い。家族だからこそ、思いや願い、愛があり、人はそこで生まれ、成長する。だが、そのつながりが深いゆえに、ゆがみが生じることもある。こうすればいいのにといい思いや、こうして欲しい、こうなって欲しいという願いは、時として家族を苦しめたり、憎しみにいたる場合もある。しかし、その根底には家族にはお互いを支えあい、守りあおうとする純粋な愛が存在する。互いにその真意を酌むことこそが、より充実した家庭生活を築くことにつながっていくであろう。

<ねらいからみた生徒の実態>

男子6名、女子11名のクラスである。祖父母と同居している生徒が多く、1学期に実施したアンケート調査では、家族を大切に思い、その一員であることを自覚していると回答した生徒が多い。しかし、中学二年生は、人間として自律への意欲が高まる時期でもある。家族と距離をおこうとし、時には「うるさい」「ほうっておいてほしい」と感じる生徒も多く、つまらぬことで家族とぶつかり、心の溝を深めてしまう場合もある。家庭の事情はそれぞれであるが、家族は生徒にとってかけがえのない存在である。毎日愛情を注がれながら生活し、家族の深い愛情の上に今の自分があることを自覚させることが大切であろう。

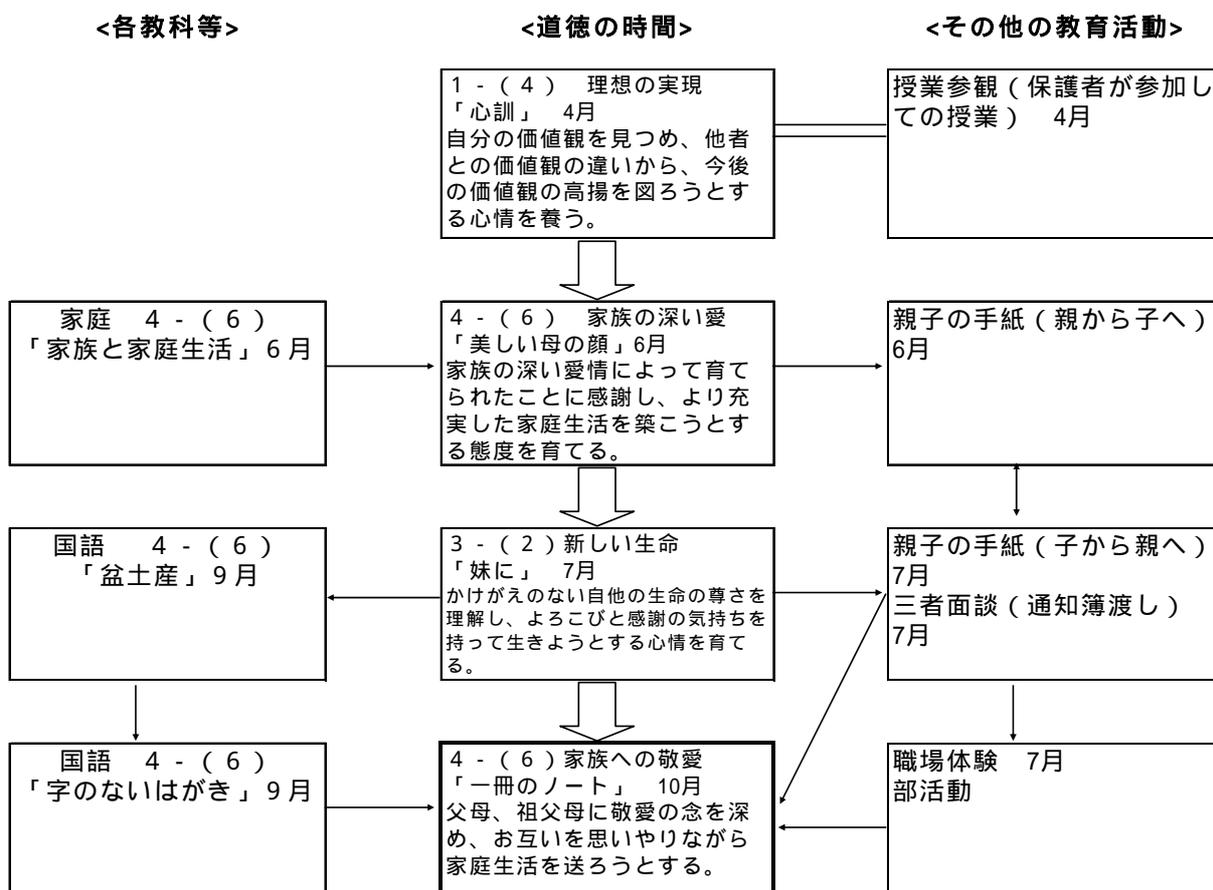
<資料の道徳的教育的意味>

幼い頃から自分や弟の面倒を見てくれていたしっかりものの祖母であったが、近頃物忘れが激しくなってきた。季節外れの服装で外出したり、家の中の物を頻繁になくしたりするなど、トラブルが絶えない。そんなある日、祖母の机上一冊のノートを見つける。自ら苦悩しながらも家族のことを一心に思う祖母の気持ちに触れることで、生徒は家族の存在のかけがえのなさを再認識し、ねらいにせまる事ができよう。

5 研究課題との関連（ 家庭や地域等との連携による一体的な推進の在り方）

生徒の健やかな心身の成長を促し主体的な自己の形成を支援するためには、学校で指導した内容は家庭や地域の生活の中に反映されなければならないし、逆に家庭や地域での生活が学校の生活に生かされなければならない。授業参観時に保護者が一緒に授業に参加し親も発言をしながら生徒と一緒に生き方について話し合うことで、共通理解は一層深まると考える。

6 関連連携のための指導計画



7 資料分析

場	祖母への不満		弟と祖母	父に訴える	ノートを見て
状況	問題集がなくなる。	外出から帰った祖母を厳しい口調で問いつめる。	頼んだ物を買って忘れた祖母を責める弟。	父に何とかならないかと訴えた。おばあちゃんの記憶は相当弱くなっている。	祖母のノートを読む。 ぼくはだまって祖母と並んで草とりを始めた。
主人公の心の動き	しっかりしてよ、おばあちゃん。ぼくらが迷惑してるんだ。	みんながおばあちゃんのことを笑っているよ。かっこ悪いじゃないか。	もうやめろよ。	これまでの祖母のことを考えると、ぼくはそれ以上何も言えなくなった。	おばあちゃん、きれいになったね。

8 準備 副読本、心のノート、ワークシート、フラッシュカード

9 展開

主な学習活動	指導の方法	生徒の心と力の高まり
<p>主題について知る。</p>	<p>○生徒の家族構成を聞く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・祖父は亡くなったが、祖母は元気だ。 ・祖父が寝たきりになっている。
<p>資料前半を読んで話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外で祖母を見かけた「ぼく」の思いを話し合う。 ・わずかに変化しつつある「ぼく」の気持ちを話し合う。 <p>資料後半を読んで話し合う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・祖母のノートを読んだ「ぼく」に共感しながら発表しあう。 	<p>○前半と後半に資料を分けて提示する。</p> <p>発問 - 薬局の前で祖母に出会ったとき、友達に知らん顔をして通り過ぎたのは、どんな気持ちからだろう。</p> <p>○「年をとればしわもできれば白髪頭にもなってしまふものよ」と言った祖母の気持ちを、保護者の立場から話してもらおう。</p> <p>発問 - 父の話を聞いたとき、何も言えなくなったのは、どんな気持ちからだろうか。</p> <p>発問 - 「ぼく」がだまって祖母と並んで草とりをはじめたのは、どんな気持ちからだろうか。</p> <p>○どうしてそういう思いになったのか、さらに「ぼく」の思いを追求したい。</p> <p>○「ぼく」がそばに並んで草とりをはじめたとき、祖母はどんな気持ちだったか、保護者の方に話してもらおう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「ぼくの気持ち分かる。」 ・「おばあちゃんがかわいそう。」 ・「おばあちゃんが笑われているのは嫌だけど、それが自分の家族だと知られるのが恥ずかしい。」 ・「自分が笑われているみたいだ。」 ・「自分だってちゃんとしたいけど、できない自分が悔しい。」 ・「そんなの分かっている。」 ・「分かっているけど、どうすればいいんだ。」 ・ありがとう。 ・ごめんね。 ・ぼくたちのことをずっと考えてくれていたんだね。 ・今までの分を恩返しするよ。ずっと長生きしてね。 ・もうあんなひどい事言わないよ。 評価 - 家族が注いでくれる愛について、あらためて考えようとする姿勢が見られたか。
<p>心のノートを読む。</p>	<p>○心のノート p104～105 上段を範読する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・家族に支えられて今の自分があるんだな。 ・素直に家族の言うことを受け入れたい。

